

日韓の教師がつくりあげた共通歴史副教材

平野 昇

共通歴史副教材づくりを始めるまで

私の所属する歴史教育者協議会（以下、歴教協）は韓国の全国歴史教師の会（以下、歴史教師の会）との共編で、『向かいあう日本と韓国・朝鮮の歴史 近現代編』を発行した。まず、韓国版が2014年6月に四季節社から、つづいて日本版が2015年1月に大月書店から出版された。

本書は、両国の中学・高校の授業や市民学習の場で使われることをめざした日韓共通歴史副教材として開発した。私たち日韓の研究会同士がどのようにして知り合い本書を作成することになったのか、その経過から述べる。

歴教協は小学校から大学までの教員、研究者、市民が参加する歴史教育・社会科教育の研究団体である。一方、韓国の歴史教師の会は、中学校・高校の歴史担当の教員を中心に初等学校・大学の教員も参加している研究団体である。全国各地に地方組織があるのも共通している。

両国の研究会の交流が始まった直接的な契機は2001年の日本の中学校歴史教科書の検定・採択問題だった。歴史教師の会から歴教協に共同で研究活動を進めたいという申し出があり、同年8月の歴教協全国大会で協議することになった。このとき、当然のことながらその年の教科書採択問題での共同行動が話題に上り、合意に到った。しかし、両者ともに社会科・歴史教育にかかわる教師の研究会であるということから、長期的には歴史教育の内容と授業実践に関する共同研究を進めていくことを中心に交流活動を進めることとなった。その内容としては、授業実践の相互交流を進めることと、日韓双方の生徒たちが読んでわかるような歴史副教材を共同で作成するという二つが取り決められた。

前者の活動として、「日韓歴史教育シンポジウム」を毎年1回行うことになった。このシンポジウムは、翌2002年から毎年1回ずつ両国交互に開催



向かいあう日本と韓国・朝鮮の歴史 近現代編
韓国版（左）と日本版（右）

場所を代えて行われている（後述）。

どんな本にするのかをめぐる議論

読者の対象は高校生を念頭に置き、できれば中学生でも理解可能な本にすることと、教科書ではなく授業で利用可能な副教材にすることが決まった。日韓双方の教師たちが授業で使えるようなものにするという点ではすぐに合意ができたが、具体的にどのような形のものにするかについては、結論が出るまでに数回の会議が必要だった。

日韓の間で歴史を語るとき、意見の相違が予想されるのは日本の加害と朝鮮の被害が明確な近代史である。近代史を扱う部分では、見解の相違を克服することは当然のことであるということは両会ともに事前に了解していた。ただ、そのような近代史部分だけを取り扱う教材、もしくは近現代史部分を重点的に扱う教材にはしないことも合意した。

いうまでもなく、古代から近世まで、日本列島と朝鮮半島に住んでいた人々が相互に影響を及ぼし合った歴史は、近代に入ってからよりもずっと長い。近代に到るまでの両国の歴史も、近現代の歴史と同じ分量で記述する上下2巻本にすることに決まった。

そして、政治史に偏らず経済活動や文化も重視し、

相手国の人々のくらしぶり・生活の様子が見えてくるような本にしようという話し合いもなされた。

以上のような合意を元に、『向かいあう日本と韓国・朝鮮の歴史 前近代編』の編集が始まった。

『前近代編』の出版へ

しかし、実際に作業を始めてみると、互いに相手国の歴史教育の内容をほとんど知らないことを認識せざるを得なかった。両国の歴史教科書では相手の国の歴史についてどのような記述をしているのか、そして、学んだ相手国の学生はどのような他国認識を形成しているかを教師たちがほとんど知らないということを確認し合い、互いの国の歴史を学びながら作業が進んだ。

日本の教師にとって、朝鮮半島から伝播した弥生文化、朝鮮半島を経由して日本に導入された仏教という認識については、程度の差はあれ認識の大枠については異論がないだろう。だが、高麗の武臣政権に立ち入ってみると、日本の武士政権とどこがちがうのかとか、（日本では近代になるまで武士政権がつづいたが）朝鮮では武臣政権がほぼ100年で崩壊しその後は文人政権がつづいた理由はなぜか、というような問題については明確に答えられる教師は少ないだろう。個人的には、編集会議で韓国の教師たちが「朝鮮半島では律令国家の時期はなかった」と語るのを聞いたとき、衝撃を受けた。日本では唐や新羅から制度を学んで律令国家を作り上げたと認識しているが、韓国では中国から律令を学び導入して古代国家を形成したとは認識していないということである。このように、最初のころの編集会議では、互いの国の歴史をよく知らないということを自覚させられることが多かった。

先に述べたように、本書は教科書ではなく副教材にするという立場でつくられた。したがって通史的な記述はせず、テーマを選んで一つ一つが独立して読めるようにした。その際、相手国と共通することや差異に気づかせるようなテーマ設定や記述のしかたを重視した。

例えば、「21 かな文字の誕生」と「22 新しい時代を開いたハンゲル」の2つの項は、成立した時代は異なっているが、両国が漢字を使って自分たちの言葉を表記していた時代から、自分たちの表音文字を作り出した過程を書いている。ここでは、アジアの漢字文化圏の国々の文字を紹介しながら日韓両国が

表音文字を作り出した意義について考えさせようと思図した。また、「32 仮面劇と民画が語る時代の風景」と「33 歌舞伎と浮世絵が語る時代の風景」の項は、ほぼ時期が重なる朝鮮時代後期と江戸時代の庶民の文化の代表例を取りあげ、両国の民衆文化の共通性と文化の担い手としての民衆の存在に気づかせたいと考えて書かれている。

上に挙げた二つの例のように両国の執筆者がそれぞれ対比される章を記述したのものもあるが、日韓どちらかの執筆者が両国を包括したテーマで書く場合もあった。その際には、両国の歴史学会の学説を踏まえ、記述する内容を調整する必要があった。「02 東アジア社会を変えた稲作」や「04 古墳で出会った韓国と日本」などの項は、両国の教科書に書かれている遺跡を取りあげながらも東アジアの中での両国のすがたを明らかにしようと思図して書かれている。

ただ一つ編集会議を重ねても共通の認識に到らなかったテーマは、倭寇である。日本では従来の「倭寇＝海賊」というような認識とは異なる新たな研究が発表され、教科書にも記述されるようになっていく。だが、そのような日本での研究を韓国の教師たちは認められないと主張した。韓国の歴史学が描いている倭寇像とは大幅な違いがあることが討議の過程で見えてきた。数年にわたって論議したが、このテーマだけは例外として日韓双方の執筆者がそれぞれの立場から書くことになった。「15 高麗を侵略した倭寇」と「16 倭寇と東アジア」がそれである。

このような経過を経て、編集を開始して5年後の2006年、上巻にあたる『向かいあう日本と韓国・朝鮮の歴史 前近代編』を出版することができた（韓国版は四季節社、日本版は青木書店から）。

予想より多くの時間を要した『近現代編』編集

『前近代編』作成は日韓双方の教師にとってまったく初めての試みであり、出版までに5年間を要した。この経験を活かせば、『近現代編』はより短い期間内に完成するのではないかと考え、編集を開始した。しかし、結果的には9年という時間がかかってしまった。

その理由の第1は、テーマの決定までに2年を要したことである。何をテーマに取り上げるか、どのような角度から取り上げるか、どんな出来事や人物を取り上げるかをめぐってさまざまな提案とそれに対する意見が両国を行き来した。

日本側はテーマ作成にあたって、韓国の学生たちが日本に対して否定的な認識だけを抱かないようにと考え、戦後史に関する記述を多くして、その中でいくつかの市民運動を取りあげることにした。だが、いったん同意したテーマにもとづいて原稿執筆が進んだ段階で、韓国側から以下のような意見が寄せられ再度全体のテーマを調整する必要が生じた。

- ・植民地期間のテーマが少なく戦後のテーマが多すぎる。
- ・植民地支配下で苦痛を受けた人々に関する記述が少ない。
- ・天皇制と戦後処理問題が少ない。
- ・原水爆反対運動の記述が多すぎる。

これらの意見を受け、新たに日韓条約や戦後処理問題を取り扱うテーマを設けたり指摘されたテーマのプロットを変更したりすることとなった。

完成原稿を作成する上で最も時間を要したのは、やはり竹島(独島)問題だった。これは編集作業を始める時点から予測していたことだった。私たちは『近現代編』編集開始にあたって、この問題を両国の教師が共同で執筆し共同原稿にまとめることを決めていた。両国間で対立が先鋭化している問題だからこそ、両国の学生たちにこの問題を考える新たな視点を提案したいと考えたからである。また、『近現代編』では、両国の違いが討論で埋められない場合、そのテーマについてそれぞれの国の立場から2つの原稿をつくり両論を併記することはしないということも、編集に取りかかる前から合意されていたからである。

この共同原稿をつくる過程では、実際にその教材案を使って授業を行い、その実践を報告し合って検討するという作業が行われた。韓国の高校生、日本

の高校生・朝鮮高校の生徒を対象に、それぞれ数回の公開授業が実施され、実践報告はその都度歴教協全国大会や日韓歴史教育シンポジウムで報告され参加者によって検討された。

数年に及ぶ度重なる原稿の改定と授業実践を経て、このテーマは「31 竹島と独島」という題名で完成した。このテーマを日韓双方の主張を紹介するだけで終わらせず、未来に向けてのメッセージもこめ一つの原稿にまとめ上げることができた。ここに本書刊行の意義が現れていると自負している。

『近現代編』づくりで意図したこと

まず、日韓両国だけでなく東アジアの中で両国の歴史を見るという観点を意識して編集した。例えば「第1章 近代国家の樹立 近代人の生き方 5 帝国主義に立ち向かうアジアの連帯」では、ベトナムから日本への留学生を組織した^{ドンスー}東遊運動の指導者ファン・ボイ・チャウ、幸徳秋水、亜州和親会の活動家章炳麟^{しょうへいりん}、安重根^{アンジュンゴン}らを取りあげ、彼らが夢見たアジアの連帯の思想を紹介している。結果論的に日本の朝鮮・東アジアへの侵略に到る経過を記述するのではなく、侵略の道とは異なった近代化の道を提起し模索した人たち、東アジアの人々の連帯で帝国主義の道を克服しようと考え行動した人たちがいたことを両国の学生たちに知ってもらい、未来を考えてほしいと考えて記述されている。

近現代史に関する記述は、政治史中心の事件・出来事の叙述と解説が中心になりがちである。だが、私たちは、具体的な人物や事件を取りあげて記述することを通して、その時代を描けないだろうかと考えた。一例を挙げると、「12 日本の侵略に対抗して朝鮮と中国が手を握る」^{キムハクチョル}では、韓国の教師が金学鉄という人物の生涯を紹介しながら中韓の反日闘争を記述している。彼は朝鮮半島から大韓民国臨時政府が置かれていた上海へと渡り、抗日運動に参加する。次いで、満州での武装闘争に参加し朝鮮義勇軍の兵士として日本軍と戦った。戦闘で片足を切断する傷を負い日本の刑務所に収監中に解放の日が来た。彼は、朝鮮半島から中国に渡りそこで創作活動しながら生涯を終えた。朝鮮義勇軍の活動は、北でも南でも公式な歴史の中では語られてこなかった。北朝鮮では、^{キムイルソン}金日成が指揮した革命闘争の歴史が公式の歴史となる中で無視され、韓国では大韓民国臨時政府の活動のみが正統の歴史とされ、社会主義者が多



日韓歴史教育シンポジウムでの公開授業
韓国の教師が日本の高校生に授業をしている

かった朝鮮義勇軍については語ることもできない時代が長かった。近現代史を生きてきたこの人物を通して今まで記述されていなかった朝鮮人社会主義者による反日武装闘争や中韓の抗日共同闘争を紹介し、従来語られてきたものとは異なる歴史像を示し、日本へのさまざまな抵抗のすがたを描こうとしている。

先に、近現代史をどう描くかについて韓国側から根本的な異論が出され、テーマ案を再検討したことを述べた。その大きな理由は、執筆者たちが同時代的に体験してきた現代史についても互いの国の歴史をじつは詳しくは知っていなかったからだと考えている。そこで、『前近代編』同様に両国の共通する事象や事件についてはテーマを並列して配置して記述するようにし、相手国の歴史を具体的に知ることができるように注意をはらった。

「第4章 経済成長と民主主義の発展 23 暮らしを変えた高度成長」は日本側執筆者が記述し、つづく「24『産業戦士』の汗と涙が韓国経済を建て直す」は韓国側執筆者が担当した。この2つの項を読み比べると、両国ともに戦後・解放後に驚異的な経済成長を成し遂げたのだが、その時期と成長のしかたには違いがあることがわかる。だが、日本では「金の卵」、韓国では「産業戦士」と呼ばれた義務教育を終了しただけの若者たちが社会の最底辺で働き、経済成長を支えたという共通性も見えてくる。

また、「第5章 平和共存の東アジアのために」の「27『命どう宝』は沖縄の心の叫び」と「28 駐韓米軍と平和を願う人々」を読み比べると、戦後・解放70年間、両国の国民が米軍基地とどのように関わりを持たざるを得なかったか、そして、多様な反基地・平和運動が展開されていたのかを知ることができる。そして、両国の基地問題は東アジアの中でのアメリカの世界戦略に深い関わりを持っていることを詳細に記述している。

このように、両国の若者たちが互いに相手国の歴史をより具体的に知ることによって、自国で展開されてきた歴史が同じように隣の国でもくり広げられていたことを理解し、東アジアの中では共通の立場に置かれていることにも気づくのではないだろうか。このように、本書では自国史を越えた記述をめざした。「日本史」・「世界史」の枠組みを超える新しい歴史教育のあり方が論議されつつある今、本書がこれからの歴史学習に活用されることを期待している。

共同作業が可能になった歴史的条件

上述のように9年をかけてようやく本書を世に問うことができた。日韓の歴史教育の場で活用できるようにと出版された書籍は、すでに数種類ある。後発の私たちの本がその中で最良のものであるなどは元より思っていない。

私たちが本書の特色と考えることは、現場の教師たち（この間に「元教師」になった者も多いが）が、どこからの経済的支援も受けずに自力でこの本をつくりあげたということである。両国で交互に行われた編集会議は、10回を越える。行き来は、文字通り手弁当だった。編集会議の通訳は両国の若手研究者たちに手当を支払って依頼したが、連絡や数次にわたって書き換えられた原稿の翻訳はすべて両国の研究会内の翻訳グループが担当した。学校現場で実際に授業をしている教師がその仕事をしながら、そして、授業実践の成果を生かしながらつくりあげたという点は、類書にない特徴であると自負している。だが、そのような成果が内容に反映しているかどうかは別次元の問題である。読者の方々のご叱正を待ちたい。

『近現代編』の作成が進むにつれ日韓関係は悪化の一步をたどり、とりわけ竹島（独島）問題、日本軍「慰安婦」問題が政治問題した。しかし、このような両国関係の悪化は、原稿検討により慎重になったことを除いては私たちの作業には影響を及ぼさなかった。それは、両会の交流活動を積み重ねる中で、とりわけ『前近代編』の作成を通して互いに信頼関係を積み上げてきたからだと感じている。

共同作業が可能になったのは、両国の教師たちが自由に相手国と往来して自分たちの研究成果を発表しあえる社会を自分たちが維持してきたことも大きい。特に韓国の場合、軍事独裁の時代を終わらせ教職員組合活動や教育研究の自由を獲得できたからこそ民間の教師レベルでの交流活動が可能になっている。教師の自主的な教育研究活動がなければ新たな教育活動を模索し実践することはできない。本書は、両国の教師たちの自主的な教育活動、研究活動が維持されている現在の日韓両国の社会状況の下で初めて可能になったと考えている。

本書が、学校教育や市民学習の場などで日韓の歴史を教えよう、学ぼうと考えて実践する方々にとって有効な教材になれば幸いである。